

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(62) 平成15年1月1日

江戸時代の国学(その4)

『古事記伝』(213/46)

本居宣長もとおりのりなが(享保15(1730)年-享和元(1801)年)は、伊勢国松阪(三重県松阪市)に生まれ、そこで一生を過ごした国学者です。松阪は、城下町でありながら商業都市として栄えており、宣長も商家に生まれましたが、家産は傾き、医者になるため京都に遊学することになります。京都では医学とともに、儒学と和学(和歌)を学び、帰郷して医者(小児科)を営む一方、『源氏物語』を中心に国学を研究します。宝暦13(1763)年、大和旅行の途中で松阪に立ち寄った賀茂真淵に面会し、翌明和元(1764)年に正式に入門しました。そして、同年『古事記伝』に着手します。(明和4年着手とする説もあります。)

『古事記伝』は、全44巻からなる大部の著作で、すべてを脱稿したのが寛政10(1798)年、69歳の時ですから、宣長の全生涯をかけた一大事業といえます。

1之巻は、古事記と日本書紀との比較、古事記の文体、かな(万葉仮名)、訓読について解説し、そして最終章「直毘靈」なほびのみたまで儒教、仏教に比べて、日本の古道が優れていることを主張します。この部分は明和8(1771)年に先行して出版され、宣長の国学者としての立場を明示したといえるものです。2之巻は『古事記』序文と系図について書かれ、3之巻から『古事記』本文の注釈となります。

『古事記伝』の刊行にあたって、宣長は自費で出版する計画でしたが、なかなか進まなかったため、門人であった尾張藩家老、横井千秋が見かねて資金を提供し刊行を促進しました。千秋は、板下を宣長自身が書くように求めましたが、宣長は長男春庭(1763~1828)に書かせました。春庭は天明7(1787)年から板下の執筆に取りかかりましたが、その重責のためか途中で眼病にかかり、失明してしまいます。そこで宣長は、板下を自書したり、あるいは次女的美濃や門人たちに書かせます。結局、宣長存命中に刊行できたのは、第1~3巻17巻まででした。その後、享和3(1803)年と思われる第4巻から文政5(1822)年の第8巻までが順次刊行されました。

当館所蔵の資料は、天保15(1844)年に初版と同じ名古屋の永楽堂が再校、刊行したものです。これには、紀州藩主徳川治宝はるとみ(1771~1853)の題字と宣長の養嗣子本居大平もとおりのあひら(1756~1833)が出版経緯をまとめた「御題字能後爾記須詞」ごだいじのしりえにしるすことばが収められた首巻が付いています。

『古事記伝』は、宣長が最高至上の古典であると信じる『古事記』の厳密な注釈であるばかりか、古学・古道のいわば百科全書であり、宣長の思想・学問の精髓は、ここに結集されているといえます。

(参考文献)

『本居宣長全集第9巻』(121.2/142)

『本居宣長』城福勇(281.08/101)